霞

―2026年度秋季展示室だより―

令和8年9月29日発行(通巻第68号)

当館では「霞ヶ浦に育まれた人々のくらし」を総合テーマに、春（４～６月）・夏（７～９月）・秋（10～12月）・冬（１～３月）と季節ごとに展示替えを行っております。本誌「霞（かすみ）」は、折々の資料の見どころを紹介するものです。展覧会や講座のお知らせ、市史編さん事業や博物館内で活動をしている研究会・同好会などの情報もお伝えします。

古写真･絵葉書にみる土浦(68)

古写真「 霞浦農業倉庫 」



目　次

○古写真・絵葉書にみる土浦（68）・・・・・１
○博物館からのお知らせ・・・・・・・・・・１
○栗山窯跡の発見（古代）・・・・・・・・・２
○京都所司代時代の政直（近世）・・・・・・３
○土浦藩の砲術家関家が探求した火術（近世）・・４
○「西杖日記」をめぐる詩歌と書画（近世）・５
○レンコン掘り用の万能をつくる（近代）・・６
○市史編さんだより・・・・・・・・・・・・７
○市史こぼれ話（２）・・・・・・・・・・・７
○霞短信・・・・・・・・・・・・・・・・・８
○コラム(68)・・・・・・・・・・・・・・・８
○歴史文化遺産情報ライブラリー公開状況・・８

川口川沿いに並ぶ霞浦農業倉庫（かすみがうらのうぎょうそうこ）（右手）の写真です。倉庫は、現在の土浦駅北側のモール505入り口の交差点付近にありました。ここは、江戸時代は土浦藩領内の年貢米の陸揚げ場所でした。川口川は、現在では暗渠（あんきょ）となり、高架道が建設されてモール505となりました。霞浦農業倉庫の跡地付近は、現在マンション等となっています。（出典：『むかしの写真土浦』より）

博物館からのお知らせ

★★テーマ展「『土浦城記』の世界―書き継がれ、失われた物語―」★★

10月10日（土）～11月23日（月・勤労感謝の日）

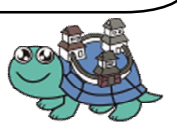
土浦城の来歴を伝える『土浦城記』が、どのように書き継がれたのか紹介します。

★★特別公開「土屋家の刀剣」★★

10月24日（土）～11月15日（日）

土浦藩土屋家に伝わった刀剣のうち、国指定重要文化財を特別公開します。

★無料開館日のお知らせ
11月３日（火・文化の日）
11月13日（金・県民の日）



博物館マスコット
亀城かめくん

★★会期中のイベント★★　**※イベントの詳細は博物館ホームページをご覧ください。**

①茨城県立土浦第二高等学校茶道部による呈茶（定員50名・先着順、茶券300円）
日時：11月３日（火）午後１時～（博物館展示ホールにて）

②記念講演会「『土浦城記』の世界」講師：西口正隆氏（国文学研究資料館准教授）
日時：11月15日（日）午後１時30分～３時（申込：10月20日（火）９時～電話または申込フォームにて）

③土浦城ウォッチング「キララちゃんバスと徒歩でめぐる『土浦城記』の世界」
日時：11月11日（水）（北門コース／瀧泉寺ほか）・11月18日（水）（南門コース／下高津愛宕神社ほか）
各コース午後０時30分～４時30分予定（申込：10月14日（水）９時～電話にて）

テーマ展後の展示予定

★ミニ展示「れんこんと土浦」★　**11月28日（土）～12月27日（日）**

★子ども郷土研究作品展★　**11月29日（日）～12月20日（日）開催予定**（表彰式・発表会は11月29日）

２０２６年度　秋季の展示資料解説①　古代

栗山窯跡の発見

―土浦最古級の須恵器窯跡―

土浦市北部に位置する新治地域を中心に、古代の須恵器を生産した窯跡の存在が古くから知られ、これまでの分布調査で 12 基を超す窯跡が明らかになっています。これらを総称して新治窯跡群と呼び、茨城県南部における一大窯業産地であったと考えられています。主要な生産活動は、奈良時代から平安時代（８～９世紀）とされています。これらの窯で生産された須恵器は土浦北部産須恵器ともよばれます。

平成８（1996）年４月、市北部の今泉地内で行われた市営今泉霊園拡張工事に伴って、栗山窯跡が発見されました。その経緯は、霊園拡張工事の事業地内に所在する根鹿北遺跡（今泉）の発掘調査が終了し、事業者が重機で台地縁辺を掘削して排水管を埋設している時に、偶然現地を通りかかった市職員により発見され、掘削箇所に鮮やかな窯跡の断面が確認された、というものです。台地縁辺の掘削工事箇所を観察しましたが、確認された窯跡は１基のみで、この後、事業者と協議を行い窯跡の調査が行われることになりました（写真１）。

調査は台地斜面部に残る須恵器を焼成する燃焼部と、焼成後の不良品を廃棄した水田面下の灰原を対象として実施されました。窯に薪を投入する焚口及び燃焼部上端の煙が出る煙道部分は既に削平されていました。この調査は、新治窯跡群で初めての発掘調査である、昭和 28（1953）年３～４月に実施された高井悌三郎らによる小野窯跡（小野）以来のものとなりました。

調査を進めていくと、燃焼部や灰原から坏や蓋などの須恵器片が出土し、被熱で歪んだものもありました。出土した坏は口径が 15 ㎝で高さ５㎝程度のものが多く、蓋は坏の口径に符合し扁平なつまみが付き、その縁は独特な作りでした。これらの出土品の特徴などから、７世紀末頃の須恵器と分かりました（写真２）。このことから、栗山窯跡は新治窯跡群のなかでも最古級の窯跡であることが明らかになりました。

栗山窯跡の発見により、茨城県南部の一大窯業産地となる土浦北部地域への窯業技術の導入の様子が理解できるようになりました。また、栗山窯跡が操業を行った７世紀末頃は、中央政府において律令制度が確立に向かう時期であり、その影響のもと地域の有力氏族によって行政施設が整備され始めます。このような情勢を考えると、窯業技術の導入やその経営も地域の有力氏族によるものと想定されます。　　（関口　満）



写真１　窯跡の発見（〇部分）



写真２　窯跡出土の須恵器など（当館所蔵）

左のＱＲコードから解説動画のウェブページへアクセスできます。

下記の資料もあわせてご覧ください。
いずれも古代コーナーに展示しています。
●東城寺寄居前窯跡の須恵器（当館所蔵）
●小野裏山窯跡の須恵器（当館所蔵）



２０２６年度　秋季の展示資料解説②　近世

京都所司代時代の政直

― 東山天皇の即位―

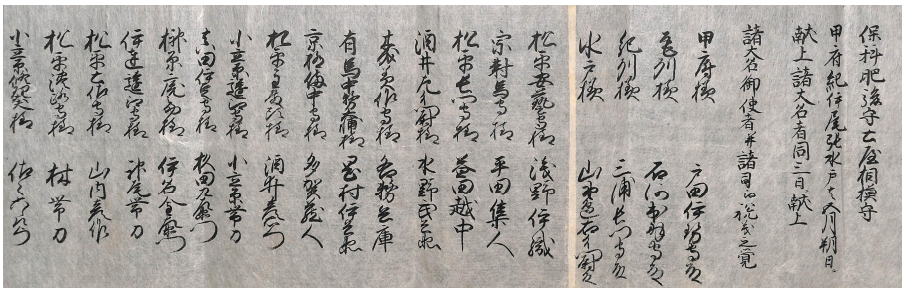
貞享２（1685）年９月 23 日、土屋家の２代当主政直（1641～1722）は京都所司代（以下、所司代と表記）に任命されます。所司代は、京都において朝廷や西国大名の監視を担う幕府の要職で、同職に就いた大名の多くがのちに幕府の最高職である老中へと進みました。大坂城代を務めていた政直は、稲葉正往（1640～1716、小田原藩主）の後任として所司代に任命され、同 10 月６日には従四位上・侍従に昇進、同 19 日に江戸を出発し、翌 11 月７日に京都に着任しています。

政直の所司代在任期間中の大きな出来事として、東山天皇（1675～1710）の即位が挙げられます。貞享４年４月、前月の霊元天皇の譲位を受けて践祚した東山天皇の即位式が執り行われました。この時、幕府から慶賀の使者として保科正容（1669～1731、会津藩主）と高家大沢基恒（1656～97、旗本）が派遣されたほか、御三家以下諸大名からも同様に使者が派遣されました。土浦藩士の家の文書にも、幕府や諸大名が京都に派遣した使者や贈答品を書き上げた記録が伝わっています。

11 月には、200 年以上途絶えていた大嘗会が再興されました。大嘗会とは、天皇の代替わり後に初めて行われる新嘗祭（神前に初穂を捧げる儀式）のことです。当時の将軍徳川綱吉（1646～1709）は儒教を重んじて朝廷尊崇の姿勢を示しつつ、幕府の権威を高めるため、宮中儀礼の復興や天皇墓の保全を行いました。大嘗会再興の背景には、朝廷側の強い要請や、幕府側の思惑があったと考えられています。

一方でこの時期の幕府は、院政を目指す霊元天皇（上皇）の動向や政務運営のあり方をめぐって朝廷統制の引き締めを模索しており、政直は京都において朝幕間の調整に腐心していたことが明らかにされています。

即位式の後、政直は幕府の命を受けて９月 27 日に京都を出発し、10 月６日に江戸に到着します。同 13 日に幕府から政直に伝えられたのは老中への任命でした。政直の後任には大坂城代の内藤重頼（1628～1690）が就任し、政直は 11 月５日に引継ぎのため再度上京の途に就き、同 16 日に京都に到着、江戸に戻ったのは翌 12 月 18 日のことでした。在任期間は短いものの、所司代時代の政直は朝幕間の難しい調整を担いました。離任後は老中となり、30 年以上にわたり江戸時代前中期の幕府政治を支え続けました。　　（井上　翼）



御即位ニ付諸国ゟ献上物之覚
（個人所蔵）

参考文献
・塚本学『徳川綱吉』（吉川弘文館、1998 年）
・田中暁龍「貞享期の朝幕関係」（『桜美林論考　人文研究』１、2010 年）

左のＱＲコードから解説動画のウェブページへアクセスできます。

下記の資料もあわせてご覧ください。
いずれも近世コーナーに展示しています。
●御系譜（当館所蔵）
●太刀馬代進上目録（当館所蔵）



土浦藩の砲術家関家が探求した火術

―火術稽古にて「花火揚ル」―

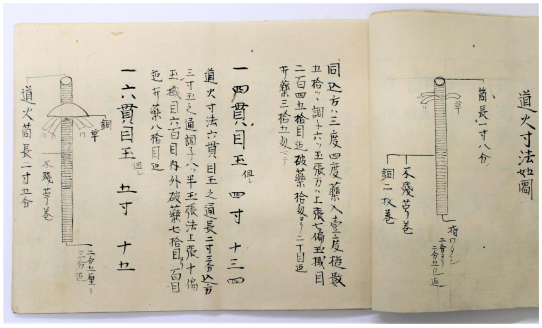
土浦藩士の関家は、「南蛮流」（通称「関流」）という砲術の流派を確立した、土浦藩の砲術指南役です。関流を特徴づける点は大筒の抱え打ちであり、大きな弾を正確に遠く離れた的へ打ち込む技術を日々鍛錬していたようです。関家は、軍兵衛家と内蔵助家の２家に分かれて、内蔵助家は江戸の藩邸で他藩の藩主や藩士たちにも砲術を教えたり、砲術の見学に行っていたことが資料から明らかになっています。今回は、内蔵助家に伝わる資料をもとに、砲術のみならず「火術」とよばれた技法を他藩から学んでいたことをご紹介したいと思います。

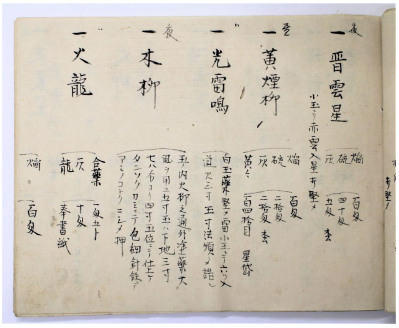
火術とは、打上狼煙（相図）ともいわれ、もともとは、情報伝達を目的とした軍事技術（武芸の一種）でしたが、打上花火誕生のもとにもなりました。大筒の底に発射用の火薬を入れて、その火薬の爆発力で狼煙玉を上空に打ち上げ、上がりきった頂点で内部の火薬に着火し開かせる仕組みです。

内蔵助家にのこる「火術混雑門　全」には、播州姫路藩酒井家の家臣真下貫兵衛という人物が火術の試し打ちを行った際の記録が書き写されています。そこには、多様な種類の打上狼煙が記されており、打ち上げる際の火薬と考えられる「打薬」の調合の割合はもちろんのこと、打上狼煙を発射させる筒、導火線である「道火」、打ち上げる際に組み立てる「櫓（矢倉）」の寸法などが細かく記されており、打ち上げる高さによってそれぞれの割合や寸法を少しずつ変えていたようです。

具体的にどんな打上狼煙が試し打ちされていたのでしょうか。記録には、名称と打ち上げる時間帯が記されており、例えば、「黄煙柳」、「降光星」、「暁烏」といった昼に打ち上げるもの、「集蝶」、「玉露星」、「火柳」といった夜に打ち上げるものがあったようです。おもわず打ち上がった形を想像してしまうようなユニークな名称がついています。

他の資料では火術や打上狼煙のことを「花火揚ル」と記しています。江戸時代の武士たちは稽古の中で、現在の私たちと同じような感覚で打上花火によく似た打上狼煙を製作し、楽しんでいたのかもしれません。　（石原千尋）





火術混雑門　全　（土浦市指定文化財　個人所蔵）

参考文献
・土浦市立博物館『花火と土浦』（開館 30 周年記念特別展図録、2018 年）
・福澤徹三『ものと人間の文化史 183　花火』（法政大学出版局、2019 年）

左のＱＲコードから解説動画のウェブページへアクセスできます。

下記の資料もあわせてご覧ください。
いずれも近世コーナーに展示しています。
●抜山銃　250 匁筒（土浦市指定文化財　個人所蔵）
●膝台打ち図（土浦市指定文化財　個人所蔵）



２０２６年度　秋季の展示資料解説④　近世

「西杖日記」をめぐる詩歌と書画

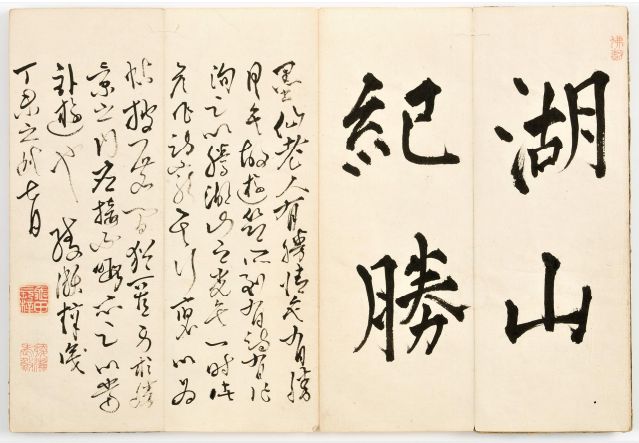
―寄せられた賛辞―

弘化２（1845）年４月６日、城下町土浦で私塾を営む沼尻墨僊（1775～1856）は、伊勢参りに出発しました。７月11日に帰郷するまでのおよそ３ヶ月間の旅日記が「西杖日記」です。江戸時代の人々にとって伊勢参りは、費用も日数もかかる、生涯に一度の大きな行事でした。旅日記には、出発の際に門人たちが銭亀橋まで見送ったこと、各地の名刹に立ち寄ったこと、土浦の豪商大国屋勘兵衛の在所、伊勢国射和（三重県松阪市）に数日滞在し、国学者の竹川竹斎と交流したことなどが、詳しく書かれています。

ひとたび旅日記を開けば、旅に出なくても、ともに旅をしているような感覚に浸れます。71歳の墨僊の旅に驚嘆した人たちは「西杖日記」を回し読みし、読ませてもらった感謝や称賛を詩歌や絵画で示しました。

土浦藩士、水戸藩士、江戸の漢詩人や常総地域で活躍していた画家ら、広い範囲から寄せられた賛辞をまとめた画帖が「諸君子題西杖日記之詩歌并書画」です。

江戸の漢詩人亀田綾瀬は序文で「この本には、当世の優れた文人らが墨僊の紀行を褒め称えた作品が収められている。開けば景勝地に入り込み、そこに遊んだような気持ちになる」と称えています。水戸藩士藤田東湖は、「墨僊は70歳を超えても丈夫で元気だ。旅行中の見聞や感想を書いて土産にした。俗世間のわずらわしいあれこれを断ち、文学に専念する姿は素晴らしい」という趣旨の五言古詩を詠みました。



諸君子題西杖日記之詩歌并書画
（亀田綾瀬の序文部分・個人所蔵）

寄せられた書画（登場順）

No.	作成者	墨僊との関係・職業	内容	和暦
1	沼尻墨潭	息子	表紙	－
2	亀田綾瀬	漢詩人	序文	弘化４年
3	沼尻墨僊	本人	序文	－
4	如蓮	神龍寺住職	七言絶句	弘化３年
5	海逸	不明	岩松図	嘉永４年
6	藤森弘庵	土浦藩士	五言古詩	－
7	朝日商豆	歌人	和歌	－
8	永年	不明	亀図	－
9	鉄岫女史	不明	七言絶句	嘉永３年
10	木原荷亭	土浦藩士	七言二句	弘化４年
11	守愚	不明	七言律詩・五言律詩	弘化４年
12	厚庵	不明	七言絶句	嘉永元年
14	小林寒林	絵師	雨後新緑図	－
15	梅翁	不明	七言絶句	－
16	墨水	不明	墨梅図	－
17	藤田東湖	水戸藩士	五言古詩	－
18	宇留野静巷	水戸藩士	七言律詩	－
19	双牛	不明	四字	嘉永２年
20	梅坡	不明	菊図	－
21	茗菴	不明	五言二句	－
22	関雪江	土浦藩士	七言絶句	－
23	五十嵐愛山	土浦藩士	四言六言	－
24	南嶺	不明	七言絶句	－
25	東風梅花	不明	漢文	－
26	大沼枕山	漢詩人	七言絶句	－
27	鈴木鵞湖	絵師	山中楼閣図	嘉永６年
28	植村蘆洲	漢詩人	七言絶句	弘化４年
29	福田半香	絵師	唐人物図	嘉永６年
30	千田与	不明	古詩	弘化４年

墨僊が安政３（1856）年に亡くなったのちも、息子の墨潭（1804～1877）によって「西杖日記」の回覧は続けられました。30件の詩歌や書画は、ひとりの旅日記が多くの読者の心を動かし、城下町土浦が豊かな文雅を育んでいたことを今に伝えています。

（木塚久仁子）

左のＱＲコードから解説動画のウェブページへアクセスできます。

下記の資料もあわせてご覧ください。
いずれも近世コーナーに展示しています。
●西杖日記　天・地（個人所蔵）
●墨僊漫筆之稿（個人所蔵）



２０２６年度　秋季の展示資料解説⑤　近代

レンコン掘り用の万能をつくる

―ある鍛冶職人の工夫―

土浦を代表する景観である霞ケ浦湖岸の広大な蓮田。現在の蓮田では、農家の人々が腰から胸あたりまで水に浸かり、水圧ポンプを使ってレンコンを収穫する光景が見られます。しかし、かつての蓮田では、水を落として、柄の長い「鋤」で周囲の土を除けながらレンコンを掘り出していました。そして、昭和 40 年代になると、それまでの鋤に代わって、「万能」と呼ばれる道具が使われ始めます。今回は、九州地方から導入されたこの「蓮掘り万能」について、その製作を担った地元の鍛冶職人にスポットを当ててご紹介します。

土浦における蓮掘り万能の導入経緯については、当館元学芸員の榎陽介さんが 1990 年頃に調査を行っています。榎さんの調査によると、土浦市手野・田村あたりの農家の人が、九州で使われていたレンコン用の万能を見て「これは便利そうだ」と目をつけ、土浦市境にほど近い阿見町の「羽成農機具店」に持ちこんだことがきっかけでした。同店は、土浦市内の鍛冶屋で修業をした先代が独立して始めた店で、農家の注文を受けて鍬などを製作していました。当時、家業を継いでいた２代目の当主は、「同じものをつくれないか」との相談を受け、一週間考え抜いた末、土浦のレンコンの収穫に適した改良を施し製作にあたりました。

蓮掘り万能は当初、黄紙三号という「刃物鋼」が使われましたが、材料費が高い上に、土に突き立てる鍬とは違って刃が切れる必要性はありません。そこで、安価な「工具鋼」を素材として選択したそうです。

また、九州の万能は右手のかかる部分が角張っていたため、当初は角型の鋼材を使うことを考えていましたが、丸型が採用されました。丸みを帯びた鋼材を採用することにより、手当りを良くする改良につながりました。さらに、砂地の多い霞ケ浦周辺で使用するには、九州の万能は薄すぎて減りが早く耐久性に欠けました。そこで全体に刃を少し厚くして、強度をもたせました。加えて、土壌によって使い分けができるよう、四本刃の先が扁平で幅のあるものも製作するようになりました。

こうして、土浦の土地にあわせた、新しいレンコン収穫の道具が生まれました。万能の利便性は評判となり、他の農家からの注文が殺到します。競合相手がいなかったこともあり、羽成農機具店では「文字通り寝る間もないほど」の忙しさになったそうです。のちに水圧ポンプが導入されるまでの短い期間でしたが、蓮掘り万能はこの地で急速に普及しました。その背景には、土地に根差した工夫を施した鍛冶職人の功績があったのです。　　（萩谷良太）



羽成農機具店が製作した
蓮掘り万能（当館所蔵）



万能の使い方の図

出典：土浦市立博物館第 15 回特別展展示図録『霞ヶ浦　人と神と水と湖のくらし』1995 年

参考文献
・榎陽介「蓮根掘りの万能」『民具マンスリー』第 29 巻 3 号（神奈川大学日本常民文化研究所、1996 年）
・榎陽介「あつらえる民具」『民具学事典』（日本民具学会編、丸善出版、2020 年）

左のＱＲコードから解説動画のウェブページへアクセスできます。

下記の資料もあわせてご覧ください。
いずれも近代コーナーに展示しています。
●船大工道具（当館所蔵）
●エビダル（未完成品）



市史編さんだより

第１回土浦市史編さん審議会を開催しました

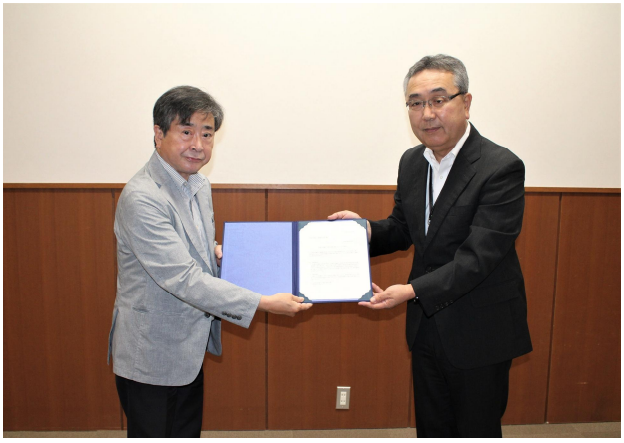
令和８年７月 14 日（火）に第１回土浦市史編さん審議会を開催しました。この審議会は、新しい『土浦市史』を令和 22（2040）年までの長期計画で編さんするにあたり、市史編さんに関する重要事項を審議するという大事な役割をもつもので、条例に基づき設置しました。

初回の会議では、教育委員会から「市史編さん基本方針（案）」の諮問を受けました。この案は、令和７年度に土浦市史編さん基本方針策定委員会がまとめたもので、その要点が前号（「霞」67 号）に記したものです。審議会では基本方針（案）の内容をあらためて確認・精査したうえで、教育委員会へ答申を行うことになります。

令和９年度には、審議会のなかに「市史編集委員会（仮）」を組織する予定です。この委員会はいわば市史編さんの実働部隊で、市学芸員と専門研究者の方々との協業で市史編さんをすすめていくことを計画しています。

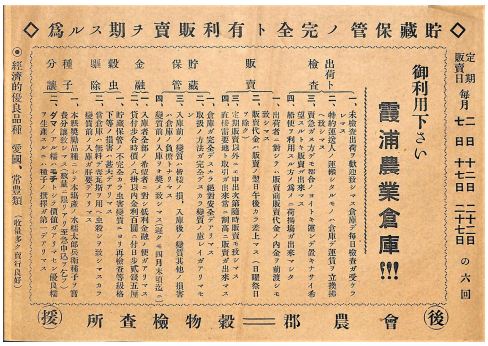
今年度は、今後の組織体制などを構築し、来年度から本格化する市史編さん事業の基礎を固めていくという大切な年となっています。

（野田礼子）



小野寺審議会会長（左）へ、奥谷教育長（右）から諮問書が渡されました。

市史こぼれ話（２）土浦町におかれた霞浦農業倉庫（かすみがうらのうぎょうそうこ）



◇貯蔵保管ノ完全ト有利ナル販賣ヲ期スル爲メ

御利用下さい

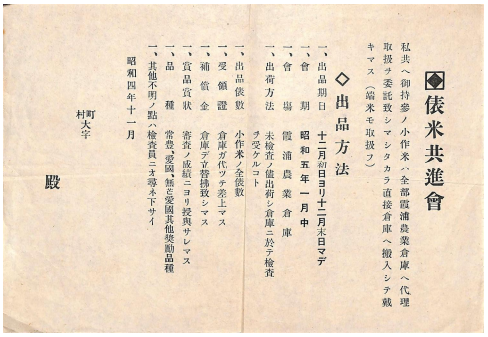
霞浦農業倉庫!!!

定期販賣日　毎月七日二十二日　二十七日　の六回

出荷ト檢査　販賣　貯藏保管　低金利ノ金融　穀物害虫ノ駆除　種子ノ分讓

◉經濟的優良品種　愛國、常豊、知一、取扱多ク賣行良好

農會（後援）　郡農業物檢查所



◆俵米共進會

私共ヘ御持參ノ小作米ハ全部霞浦農業倉庫ヘ代理取扱ヲ委託致シマシタカラ直接倉庫ヘ搬入シテ戴キマス（端米モ取扱フ）

◇出品方法

一、出品期日　十二月初日ヨリ十二月末日マデ

一、會　期　昭和五年一月中

一、會　場　霞浦農業倉庫　未檢査ノ儘出荷シ倉庫ニ於テ檢査ヲ受ケルコト

一、出荷方法

一、出品俵數　小作米ノ全俵數

一、受領證　倉庫ガ代ツテ差上マス

一、補償金　倉庫デ立替拂致シマス

一、賞品賞狀　寄贈ノ成績ニヨリ授與サレマス

一、品　種　常豊、愛國、無芒愛國其他奬勵品種

一、其他不明ノ點ハ檢査員ニオ尋ネ下サイ

昭和四年十一月

町村大字　殿

霞浦農業倉庫は、昭和２（1927）年 12 月９日付けの官報に設立が公示され、同３年に土浦町 3008 番地２へ新築落成し、同４年に移転が公示されています。業務としては、穀物の出荷と検査、販売、貯蔵・保管、低金利での金融、穀物害虫の駆除、種子の分譲などが行われました。

土浦町だけでなく近隣町村も利用できる施設だったため、新しい人の流れを作り出す要因にもなったようです。

霞浦農業倉庫では新築落成記念として小作俵米共進会（こさくたわらまいきょうしんかい）が同年 12 月に開催され、その後も 12 月末に出品を募って翌年１月にも共進会が開催されました。

（江島万利子）

写真上「霞浦農業倉庫利用案内」（史料番号 M87）

写真下「俵米共進会の出品方法案内」（史料番号 M75）

（いずれも『土浦の古文書　第三十三集』掲載の菅谷家文書）

霞 短信

このコーナーでは、博物館活動にかかわる方々の声やサークル活動の記録などをお伝えしております。

今号では、夏休みファミリーミュージアムの体験講座「戦争体験のお話をきく会」にご参加いただいた茨城県立土浦第二高等学校第２学年の早水元希（はやみずげんき）さんにご寄稿をいただきました。

受け継ぐ戦争の記憶

８月８日（土）、「戦争体験のお話をきく会」に参加しました。東京から土浦へ学童疎開した経験のある森玲子さんの「聞き役」を務めさせていただきました。これまで学校の授業で習ってきた戦争は、全体を大きく捉えるものが多く、私は、どこか遠い昔の出来事のように感じていました。しかし、森さんのお話はそれとは違う新鮮なものでした。

森さんからは、日々の食事や手紙による家族とのやりとり、疎開先での規則、子どもながらの心境などをお聞きしました。どのお話も当時を本当に生きているような生々しさがあり、現在の生活と重ね合わせることで、戦争をより身近なものとして実感できました。例えば、家族が手紙を書くときに「包装紙の花柄の部分」を切り取って使ってくれたというお話からは、物資が本当に足りなかった様子が伝わってきました。また、大切な家族との手紙でさえ検閲されたというお話から、言論統制が出版物や公的な発言だけに及ぶものではなかったことにも驚きました。

私は今まで、戦争の恐ろしさとは戦地で兵士同士が戦い、多くの人が命を落とすことだと思っていました。しかし実際には、軍需工場への徴用や空襲、物資不足や言論統制など、普通の人々の生活にも大きな影響があったことが分かりました。そのため、戦争について考える際には、戦地だけでなく、そこで暮らしていた一般の人々の日常にも目を向けることが大切だと感じました。



今回のお話を聞き、戦争は決して遠い過去の出来事ではなく、一人一人の生活に深く関わるものだったのだと改めて感じました。だからこそ、こうした生の声を聞き、未来の世代へ平和を引き継いでいくことが大切だと思います。このような貴重な機会を与えて下さった土浦市立博物館の皆様、何より森玲子様に心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

（茨城県立土浦第二高等学校　第２学年　早水元希）

コラム（68）　「受付業務をとおして感じられた喜び」

博物館には日々たくさんのお客様がご来館くださいます。老若男女問わず、また、観光で訪れて土浦の歴史を知ってくださる方もおり、当館の学芸員としてはとてもうれしく思っています。学芸員は受付業務を担当しませんが、実はお昼の 12 時から 13 時の１時間だけ、日々交代で務めています。今年度７月 18 日（土）から８月 30 日（日）に行われた「夏休みファミリーミュージアム」では、小学生の児童などを対象としてテーマ展「土浦の歴史探検隊」に関する博物館クイズラリーを企画しました。展示をよくみていくとクイズの内容と答えがわかるもので、当館では毎年開催しています。今年度も多くの方が参加をしてくださり、私が受付を担当した際にクイズに参加してくれた小学生がいました。私が、「展示は楽しめましたか？」と聞くと、「はい、とても楽しかったです！」と笑顔で答えてくれました。今回私は展示の担当者ではありませんでしたが、展示をみて喜んでくださるお客様が日々いるのだろうなと思い、とてもうれしい気持ちになるとともに、その出来事は私の中で一番の夏の思い出になりました。　（石原千尋）

土浦市の歴史文化遺産情報ライブラリー公開状況

【2026.9.29 現在の登録数】212 点

①映像ライブラリー・・・・・・18 点
②古写真ライブラリー・・・・・・ 8 点
③絵葉書ライブラリー・・・・・81 点
④絵巻物ライブラリー・・・・・30 点
⑤古文書ライブラリー（準備中）
⑥歴史資料ライブラリー・・・・36 点
⑦民俗資料ライブラリー・・・・39 点
⑧新聞記事ライブラリー（準備中）

霞（かすみ）　2026年度
秋季展示室だより（通巻第 68 号）

編集・発行　土浦市立博物館
茨城県土浦市中央１－15－18
TEL　029－824－2928
FAX　029－824－9423
http://www.city.tsuchiura.lg.jp/tsuchiurashiritsuhakubutsukan/index.html

１～６ページのタイトルバック（背景）は、博物館２階庭園展示です。

2026 年度秋季展示は、**2026 年９月 29 日（火）～12 月 27 日（日）**となります。「霞」2026 年度冬季展示室だより（通巻第 69 号）は **2027 年１月５日（火）発行予定**です。次回の来館もお待ちしております。

※展示室だより「霞」は、当館ホームページからもご覧になれます。（カラー版）